

震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013年04月27日

(C)河北新報社



国際協力機構（JICA）事務所でインドネシアでの活動を報告するむすび塾のメンバー＝26日午後6時ごろ、ジャカルタ（写真部・佐々木浩明撮影）

# 「後世に語り継いで」

## むすび塾、現地で成果報告

インドネシア



【バンダアチエ（インドネシア）高橋鉄男】報道部「東日本大震災の教訓を減災・防災につなげよう」と、インドネシアを訪問中の巡回ワークショップ「むすび塾」の一行は26日、首都ジャカルタで国際協力機構（JICA）インドネシア事務所や現地の邦字紙にむすび塾の成果を報告し、6日

間の滞在日程を終えた。JICAとの共催で、2004年のスマトラ沖地震で被災したバンダアチエ市など2カ所でむすび塾を開催。東日本大震災の語り部として参加した東松島市の貝田行政区長中山勝文さん（67）、大崎市の水難学会指導員安倍志摩子さん（51）、多賀城市の東北学院大3年渡辺英莉さん（20）と現地住民が、津波の教訓などを話し合った。

報告の中で安倍さんは「悲劇が繰り返されぬよう、しっかりと後世に語り継いで」と語り、中山さんは「子どもを現地の一人ひとりに励まされた」と振り返った。

進行役を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓理理事長は「本格的な復興や後世につなげる防災、減災はこれからが本番。避難道の整備や防災教育に力を入れてほしい」と今後の復興や再生に期待を寄せた。

渡辺さんは、震災時に一緒に避難した祖母が津波の犠牲になり、自分を責める日々が続いた。「つらい思いを、底抜けの明るさで包みこむ現地の人々に励まされた」と振り返った。